

# 治療専門医学物理士 について

2019年7月7日 医学物理士認定機構 説明会

# 資格の骨子

- ▶ 放射線治療の臨床医学物理業務を高い水準で独立に遂行する能力を有する医学物理士を、治療専門医学物理士として認定する。
- ▶ 医学物理士資格取得後、医学物理士として治療分野において3年以上の臨床経験を有し、その間放射線治療システムの品質管理・治療計画等の経験後、治療専門医学物理士認定試験に合格した医学物理士を治療専門医学物理士として認定する。
- ▶ 治療専門医学物理士認定試験は筆記試験の一次試験および口頭試験の二次試験の2段階で行われる。
- ▶ 治療専門医学物理士は5年毎に更新する。
- ▶ がん診療連携拠点病院の基準は、従来の医学物理士の認定で十分。
- ▶ 今後のIMRTの施設基準において、治療専門医学物理士が必須となるようなことは想定していないし、そのような動きも聞いていない。

# 国内背景

- ▶ 現在、1,000名を超える医学物理士が認定されているが、実際に医学物理業務に携わっている者、または医学物理士として雇用されている者は多数派ではない。
- ▶ 強度変調放射線治療(IMRT)等の治療計画や品質管理に係る臨床的技量に関して、医学物理士への期待は大きくなる一方。
- ▶ 2014年に実施された医学物理士に対するアンケート結果においてもQA担当者の配置・専従化を望む声が圧倒的多数。

# 国際動静

- ▶ 国際医学物理士認定機構（IMPCB）が2010年に発足し、2017年には第1回の医学物理士試験が行われた。
- ▶ 認定方針として下記のモデルが採用された。
  - ▶ Part I 医学物理全般に対する筆記試験  
（医学物理学等の修士以上で受験可）
  - ▶ Part II 各専門分野に対する筆記試験  
（2年以上の臨床研修修了で受験可）
  - ▶ Part III 各専門分野に対する口頭試験  
（Part IとPart II 合格で受験可）

# 認定機構の議論経緯

- ▶ 2014年頃まで 医学物理士の専門的地位の確立を目的として国際基準に合致した認証モデルを目指して口頭試験導入を本格的に検討していた。
- ▶ 2015年頃、国家資格化への機運が高まり、口頭試験の実施は保留状態になる。
- ▶ 2017年 執行部の交代。これまでの方針を堅持しつつ、前述の国内背景を踏まえ、医学物理士の臨床的技量の客観的評価の重要度にどのように応えるかを検討。
- ▶ 保険収載の議論の中で、IMRTの施設基準として医師1名、医学物理士1名で可とする案がJASTROにて審議される。これに特化した研修制度を作る検討もなされた。
- ▶ しかし、研修の質の確保に対する課題、また個別の技術に特化した資格創設は資格の乱立を生み、最終的に医学物理士のためにならない等の判断があり、保険収載とは独立に、本来の方針であった国際基準に合致し、真にの意味で患者のためになることを目指した専門資格を作り、国内の動静変化にも応えられる人材を認定する方針となった。

# 治療専門医学物理士の検討経緯

- ▶ 2017年後半 IMPCBの医学物理士認定のモデルとなった米国 ABRの医学物理士免許保持者および大学病院等で臨床医学物理業務を担っている医学物理士を中心とするWG発足
- ▶ 2018年2月 ABR医学物理関係トップのDr. Don Freyを招聘。意見交換。特に口頭試験について助言を得る。
- ▶ 2018年5月 WGメンバー2名をABRの試験会場に派遣。口頭試験を実際に見学し、合否判定会議も見学。
- ▶ 2018年9月 WGメンバー2名をABRの試験作成委員会に派遣。
- ▶ 2019年1月 本番を模擬した模擬口頭試験をボランティアに対して実施。
- ▶ 2019年3～4月 制度骨子について、出資3団体（JRS、JASTRO、JSMP）理事会へ原案を説明し、口頭試験の受験資格・試験回数等の軽微な改訂のうえ、承認。
- ▶ 2019年5月 試験公布

# 国際医学物理士認定機構モデルとの比較

▶ Part I 医学物理全般に対する筆記試験

現在の医学物理士試験相当

▶ Part II 各専門分野に対する筆記試験

▶ Part III 各専門分野に対する口頭試験

今回の制度において  
カバーされる範囲

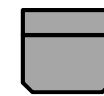
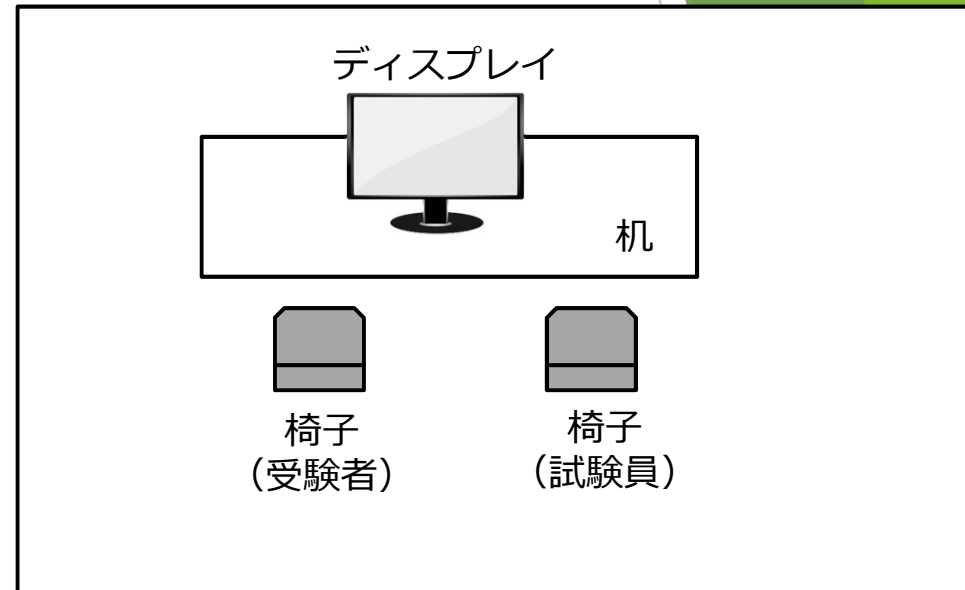
# 治療専門医学物理士一次試験

- ▶ 日時： 2019年9月28日（医学物理士試験と同日開催）
- ▶ 試験会場： 首都大学東京 荒川キャンパス
- ▶ 試験時間： 75分間×2（午前・午後を予定）
- ▶ 方式： 多肢選択式



# 治療専門医学物理士二次試験

- ▶ 日時： 2019年12月7、8日  
いずれか1日
- ▶ 試験会場： 東京都内
- ▶ 試験時間： 約20分×3（予定）
- ▶ 方式： 口頭試験  
ディスプレイに問題提示  
3試験室の各試験員に対して回答  
一人の受験者は3名の試験員から合計10問の出題



椅子  
(待機受験者)

口頭試験室レイアウト (案)

# 本制度で期待されるメリット

- ▶ 国際基準に準拠した資格制度となる。医学物理士の質の保証が世界的なレベルと同等になる。
- ▶ 制度の普及により、患者さん・ご家族、医師や他のスタッフに一層信頼され、責任をもって放射線治療の向上に貢献していることが明示できる。
- ▶ 制度が普及し、信頼性が向上することにより、将来的には加対象となることも考えられ（現時点で決定していることは何もないが）、医学物理士の処遇改善に資する可能性がある。

# お願い

- ▶ 現在の医学物理士資格保持者に試験受験のための負担をかけることになる。
  - 医学物理臨床業務に従事している医学物理士であれば基本的に把握しておくべき内容を問う試験を想定。国際基準準拠の必要性の観点より、ご理解を賜りたい。
- ▶ 現在の医学物理士との関係性が不明瞭にならないか。
  - 現在の医学物理士は医学物理士制度の根幹であり、本制度によりその地位を変えるものではない。医学物理士は診断・核医学・防護・研究・教育の幅広い領域での活躍が求められている。治療専門医学物理士に一本化するということはまったく考えていない。